

2015年

—国語— 第1回午前

(50分/100点満点)

注 意

- ①指示があるまで開いてはいけません。
- ②解答は、すべて「解答用紙」に記入してください。
- ③質問がある場合、鉛筆^{えんぴつ}などを落とした場合、トイレ
に行きたくなった場合、気分が悪くなった場合は、
だまって手をあげてください。
- ④ 、 。 「 」 “ ” はそれぞれ一字と考えてください。

受験番号

氏名

【一】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

陸上部に所属する真歩（わたし）とみらいと沙風と葉月の四人は小学生のころから一緒に走っていたメンバーであった。最後の大会に向けて練習にはげんでいる中、中心選手である沙風は足を怪我してしまった。そして、キャプテンを務める真歩は最後の大会前に後輩の美羽留にリレーのレギュラーを取られてしまった。顧問の立花先生の決定したレギュラーに納得のいかない沙風と葉月は練習に出てこなくなった。

日曜日もちろん練習だ。

休憩の間、後輩たちの話題は、一週間後に迫った期末テスト。

そんな中、わたしの頭を占めていたのはひとつ、沙風と葉月が戻ってこないこと。そのことだけだった。沙風たちがグラウンドに姿を見せなくなつて、もう六日目。時間だけがものすごい早さで過ぎていく。

教室とかで会つてるときは、陸上のことに触れない以外普通に話している。夜ラインで、明日こそ練習きてねって毎日送るけど、返事は決まって、わかっている、のひとことだけ。葉月からきてた、『真歩の明日の運勢』もパタリとこなくなった。占いに従ってパールのパンツ買う気はないけど、こないと寂しい。

「真歩、明日からの朝練だけど」

みらいが耳元でささやく。明日テストの日程の発表があつて、一週間はどのクラブも朝練は禁止だ。

「もちろんするよ。ひとりでも」

「だよ。わたしも参加する。ねえ、それにしても……」

みらいが校舎を見る。吹奏楽部が楽器ごとにわかれて、三階を占領している。

「わたしからも、何か言つたほうがいいかな。沙風たち」

みらいもやつぱり心配してるんだ。バスケ部の理央と駒田君も気にしてくれていた。

「男はさ、気が晴れたらそのうち戻ってくるけど、女って、一度部活から離れちゃうと、そのまんまっていうのが多いよな」

駒田君の説は妙に A 力があつた。

どうすれば沙風や葉月の、心の中の手のひらに、バトンを渡せるのだろう。いっしょに走りたい気持ちはみんな同じはず。しかも

もう次はないのだ。

みらいの部屋のドアに貼つてあつた、キャラクターイラストを思い出す。わたしのだけじゃなく、沙風と葉月のもあつた。

「ものを描くって、目に見えているものをどれだけ深く愛せるかなんだよ。その愛情の深さが見えない部分まで、色や形や線になつて表現されるんだ」

みらいが尊敬するイラストレーターの言葉を引用して話してくれた。沙風のモデル顔と葉月の長いきれいな髪。あのイラストを見れば、みらいがふたりのことを、どれだけ大好きかわかるはず。かといって、あの二枚の絵を持ってきて沙風たちに見せても、「だから何？」って言われそう。

でもやつぱりあの絵だよ。あの絵を届けたい！

そう思つた瞬間、いいこと閃いちやつた。

「みらい、ちよつときて」

鉄棒の場所までみらいを引っぱつて、今考えた計画を話した。

「うん。やってみよう」

練習のあと立花先生に言った。

「先生、部室の鍵、今週も貸してもらつていいですか？」

「明日もやるのか？」

「そのつもりです」

「規則はわかつてるだろうな」

「はい。でもやりたいんです」

「好きにしろ。ほらっ」

立花先生が鍵を放った。

「ありがとうございます」

一礼して去ろうとしたら、

「待て、真歩！」

先生に呼び止められた。

「なんですか？」

③「誰かになんか言われたら、立花先生の許可をもらってますと言え。自分で責任をとろうなんてするなよ。それだけはおまえの勝手にさせない。忘れるな。どんなときでもおまえはおれの生徒だ」

月曜の朝、晴れてホッとした。

思わず日頃のわたしの行いが、と口にかけてやめた。立花先生と同じレベルだ。

どうせくるだろうと思ってた美羽留も含め、三人での作業になった。

「美羽留。みらいの指示に従うんだよ」

「あ、でも、ローカ水浸しにするとか、マットに火をつけるとか、ダメですよ」

「言わねーよ！ もう、くだらないことばっか言わないで。時間ないんだから」

わたしは部室の鍵をあける。鉄の扉が朝露に濡れている。

みらいがバットでグラウンドに下絵を描き出した。金属バットはお兄ちゃんが使っていたもの。

「美羽留はこっちへきて、石灰を積んで」

美羽留が駆けてくる。

「キャプテン、これだけ声を通ると気持ちいいですね。歌うたっていいですかあ」

「バカッ。通報されるだろ。ほら、そっち持って。リヤカーに乗せるんだから」

「袋に二十キロって書いてありますよ。へえっ、キャプテン、これラインパウダーなんておしやれな名前ついてるんですね。そう

言えは知ってました？ 掃除のとき使ってる洗剤、ジョーっていう名前なんです。洗剤の浄にかけてるみたい。笑えますよね」

「笑うより黙ってくれない！」

「ハイっ」

ようやく美羽留を静かにさせて、みらいの制作が始まった。そう、グラウンド一面にバトンパスするふたりを、ライン引き用の石灰を使って描くのだ。

もちろん顔は沙風と葉月だ。

みらいはノートに描いた下絵を見ながら、大胆に構図を決めていく。わたしと美羽留はライン引きを使ったり、ときにはシャベルや手作業で、みらいのあとを辿る。べた塗りの箇所は、豪快に石灰をまき、目や口、髪のはね具合は、みらいのテクニクが光る。ときおり手を止め深呼吸する。葉っぱのにおいがしておいしい。*符音ならきつと、この朝の空気を五線譜に書きとめたいと言うんだらうな。

仕上げは色付け。体育祭のときにだけ使うカラーパウダーが、作品を華やかに彩る。

「バトン、何色にする？」

みらいは色の使い方にもこだわる。そのへんはお任せだ。

「ユニフォームに赤が入るから、黄色が目立つかな。シューズ青にして」

「ねえみらい、沙風の髪、緑混ぜちゃおうか」

「なんか、萌えキャラになっちゃいそう」

時間との闘いだっただけ、なんとか完成させることができた。

「何かひとこと書いてこうよ」

みらいが言う。

「バカふたりはどうです？」

美羽留がにやにや笑う。

「おまえな……」

「冗談ですよ。こういうのは、キャプテンが決めないと」

「じゃあ、全力ダッシュ！はどう？」

「それピッタリ。きつと走ってくるよ」

下駄箱の入り口がぁいて、一番で校舎へ入ると、まっしぐらに三階へ階段を駆け上がった。

窓をあけ三年二組の教室から見おろすと、

「おおおー、すっげええー！」

思わず叫んでみらいと抱き合った。

葉月から沙風へ、完璧なバトンパスの絵だ。

風を切る音と息づかい、湧きおこる歓声とスパイクの音が聞こえてきそうだ。

続々と登校する生徒たちも、一夜で現れた地上絵を、半分驚きながら楽しんでいた。みんな三階から見ようと押し寄せてきて、文化祭みたい。たこ焼きでも売りたいくなる。美羽留は懸命に宇宙人説を説いて回ってたけど、誰も信じなかった。

そして誰が呼んだか、上空に新聞社とテレビ局のヘリコプターまで現れた。

絵を見れば誰もが同じことを思うわけで、わたしたちは校長室に呼ばれた。

もちろんわたしは、教えてもらったとおりにこう言った。

「立花先生の許可はもらっています」と。

放課後、わたしがみんなの真ん中にいた。立花先生は練習に出てこれられない。臨時職員会議の主役だから当然だ。

さつき廊下で会ったとき、

「おまえらは心配するな」

引きつった笑顔を浮かべ強がっていた。

「それじゃ今日も、全力ダッシュでお願いします！」

「お願いします」

みんなが声を張った瞬間、

「あっ！」

みらいが校舎を指さした。

沙風と葉月が、こつちへ向かって歩いてくる。沙風はまだ松葉杖だけど、ふたりともジャージに着替えて、葉月がふたり分の荷物をしよつてる。

「センパイ」

わっ、もう美羽留が泣く準備をしてる。沙風と葉月が加わり、もう一度「しゅーごー」からやり直した。

「いろいろ心配かけたけど、今日からまた、よろしく。明日にはギプスはずせるから」

沙風が、歩くのと同じくらいいきこちなく笑うと、みんなから拍手が起こった。

そして葉月。こつちのほうでわたしは心配だった。

「あのー、どうでもいいけど、わたしの顔、むちゃくちや踏み絵にされてんだけど」葉月はニヤッとみらいを見る。体育の授業もあつたし、もう原形をとどめていない。葉月がみらいに顔を寄せた。

「どうせ描くんだったら、今度人に踏まれないのを描いてよ」

「踏み絵の次は魔除けですか」

美羽留がすぐに突っこむ。ほんとひとこと多い。でもそのひとことで、^⑤わだかまっていたものが、すーっと溶けた。陸上部の誰もがこのふたりを待っていたのだ。

「それじゃもう一度。全力ダッシュで、お願いしまーす！」

「お願いします！」

そうだ西野センパイに言わなくちゃ。

——わたしのモットーが、やっと決まりました。全力ダッシュです。引退一か月前ですけど(笑)。——

(村上しいこ『ダッシュ』)

*ライン……携帯電話による通信方法の一つ。

*符号……ピアノの練習を優先するために陸上部を辞めた真歩の同級生。

*西野センパイ……陸上部のセンパイ。

問一

A にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 説得 イ 包容 ウ 強制 エ 理解 オ 納得

問二

①「心の手のひらに、バトンを渡せるだろう」とありますが、どのような意味ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 試験が終わったら一緒に練習したいと伝えること。
イ 自分たちの一緒に走りたいという気持ちを伝えること。
ウ 自分たちの熱心な思いをバトンを渡すことで伝えること。
エ 閉ざされた心を開くために自分が必死に走ることに。
オ 自分たちの間違いを認め、相手の気持ちになること。

問三

②「いいこと」について次の間に答えなさい。

(1) いいこととはどのようなことですか。「〜こと。」に続くように、本文中の ③から ④までの間から、三十五字で抜き出しなさい。

(2) どのようなことを伝えるために考えたのですか。本文中の言葉を使って、四十五字以内で答えなさい。

問四 ③「誰かになんか言われたら、立花先生の許可をもらってますと言え。」とありますが、この時の立花先生の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いいことをしていないとわかっていても、陸上部の生徒を見たら何かせずにはいられない気がかい。
イ 他の先生たちよりも、自分の方が部員の気持ちを分かちあっていることを証明したいというわがまま。
ウ 何事よりも部活動を第一に考え、どんな状況においても練習を優先する教育者としての熱意。
エ 悪いこととはわかっていながらも、頑張る生徒のためなら仕方がないというあきらめ。
オ 規則を破っても友人のことを思い、部活動に取り組む真歩の気持ちを考えてくれる優しさ。

問五

④「スパイクの音が聞こえてきそうだ」の「そうだ」と同じ性質のものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明日は雨が降るそうだ。
イ 来週には花が咲きそうだ。
ウ サルも海を泳ぐそうだ。
エ 夜でも鳥がなくそうだ。
オ 森がなくなるそうだ。

問六

⑤「わだかまっていたもの」とはどのような思いですか。次の文の空欄に当てはまる内容を考えて十字以内で答えなさい。

沙風と葉月が陸上部の練習に出てきてくれなかったことで、 思い。

問七

本文はどのような物語ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 部員一人一人が持つ強い思いを、主人公が周囲の力を借りて一つにまとめ、理想とする陸上部を作っていく物語。
イ 個性的な部員の中で、キャプテンとしての自分のあり方が見えない主人公が、周囲との関係の中で成長していく物語。
ウ 個性の強い部員たちが、熱意のある先生との関係をつくりながら、チームをまとめあげていく成長を描いた物語。
エ 陸上部員たちそれぞれの熱い思いと、主人公のゆれ動く気持ちを描き、友情とはなにかをうったえかけていく物語。
オ キャプテンとして未熟な主人公が誰にも思いつかない方法で、個性豊かな部員たちを一からまとめていく物語。

【二】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

毎日のように、新聞やテレビで、地球環境問題が報道されています。みなさんも、よく目にするでしょう。いままでの人類の歴史の中でも、これほど地球の環境が問題になったことはありませんでした。また、二〇〇七年のノーベル平和賞は、地球環境が悪くなるのを警告し、活動している国際的な団体や個人が受賞しました。

① 地球環境問題^①といっても、いろいろな問題があります。

地球温暖化の問題。海や川や飲み水が汚れて^こいる問題。空気が汚れて^こ病気が増えている問題。そして、わたしたちが使っている水が足りなくなってしまう問題。世界の人々が食べる食料が足りなくなってしまう問題。台風や竜巻^{たうまき}が増えている問題。こんなにたくさん^②の問題があります。しかも、これらの問題は、おたがいに関連しあっているのです。

これらのどの問題も、わたしたち地球に住む人類ひとりひとりが、考えて、立ち向かっていかなければならない問題です。でも、新聞やテレビにあふれている情報だけを見ていると、^③ A、こんな問題が起きたのか、そもそも問題の根元はどこにあるのか、どう考えればいいのか、といった肝心なことはなかなかわかりません。

それは地球ができてから、今日までの地球の歴史について考えていないためなのです。ひとつの例をあげましょう。地球が、みなさんが住める温度になっているのは、^④ B、太陽の光が地球にあたえてくれる暖かさのおかげです。

^⑤ C、もし地球に二酸化炭素や水蒸気がなければ、せっかくの太陽から来た熱はどんどん地球の外に逃げてしまうのです。そうすれば、地球の温度はどこでも零下[＊]一〇度よりも、もっと寒くなってしまうます。これでは、とてもわたしたちが住める温度ではありません。最近、地球温暖化の問題で悪者にされている二酸化炭素は、^⑥ ②「いつも悪者」というわけではないのです。

地球の温度は、こうして、太陽からの熱と、地球がいま持っている、二酸化炭素などのガス（気体）との、とても微妙なバランスで決まっているもののなのです。

^⑦ D、地球上にある水も空気も、はるかむかしに地球が一度だけ、大量に作ってくれたものだということをみなさんは知っていますか？ その後、地球は一度も水を作ってくれてはいません。

いまある水を、どう使うか、どう生かしていくかを考えていくときに、このように、地球全体のなりたちを知ってから考えることが大事なのです。

地球の水には、むかしにはなかった問題がいろいろ出てきています。

ひとつは食糧^{しきりょう}を作るための水の問題です。作物を育てる農業のためには水が必要です。日本でも雨が少なくと農作物の不作がユースになるように、植物にとつて、水はとても大切なものです。^⑧ この農業のための水が、世界各地で、足りなくなっているのです。中央アジアにあるアラル海は、一九五〇年代までは世界第四位の大きな湖で、琵琶湖^{びわこ}の一〇〇倍もある大きな湖でした。この湖はカザフスタンとウズベキスタンの国境にあります。アラル海には流れこむ大きな川がふたつあって、これらの川はいずれも高い山に積もった雪や、その雪からできた氷河が溶けた水からきていました。

日本の湖ならば、ふつう流れこむ川も、湖から流れ出る川もあります。流れこむだけでは、湖がいつぱいになってあふれてしまうように思えます。でも、アラル海から流れ出る川はありません。アラル海のまわりは砂漠^{さばく}のような乾燥地帯^{かんそう}で空気が乾燥している^⑨ので、水はどんどん蒸発して減っていきます。ですから、アラル海の場合には大きな川がふたつ流れこんでいても、蒸発する水の量とバランス^⑩していて、湖の大きさは一定だったのです。

湖の近くの気候も、この湖のおかげでおだやかなものになっていました。湖があれば、気温もそう上がりませんし、冬もそれほど下がりにません。ここでは漁業もさかんで、年に五万トンというたくさんの魚がとれていました。水があり、魚もとれ、湖のまわりでは農業ができましたから、乾燥地の中の大きなオアシスとして、多くの人々が湖のまわりに暮らしていたのです。

しかし、一九四〇年代からアラル海に流れこむ川の上流で大規模な灌漑^{かんがい}農業が行われるようになりました。これまでアラル海に流れこんでいた川の水を使って、大規模に綿花を育てる農業がはじまったのです。これは当時のソ連[＊]（カザフスタンもウズベキスタンもソ連の一部でした）が国としてとても力を入れていた国家計画でした。

川のまわりは乾燥地帯ですから、雨を降らせる雲も少なく、もともと太陽の光はいつも照っています。あとは水さえあれば、作物はよく育つのです。このように、人工的に水をやって作物を育てる農業のことを「灌漑農業」といいます。

灌漑農業を始めたために、アラル海に流れこむ川の水がほとんどなくなり、アラル海の水はどんどん減りつづけたのです。そして、アラル海はどんどん小さくなっていき、いまではむかしよりはるかに小さくなってしまうました。二〇二〇年までには、アラル海はまったく消えてしまうのではないかといわれているほどです。

むかしの湖岸だったところは、いまは砂漠のようになっていて、水が減って使えなくなってしまった船がいくつもすてられています。たくさんとれていた魚も、まったくとれなくなってしまうました。これは、アラル海の水が減ったせいだけではなく、海水の十

分の一ほどの濃さの塩分で、ほとんど真水だった湖水が、濃い塩水になったせいです。湖の水が蒸発して減って、アラル海の水が煮つまったようになり、塩分がとても濃くなって、魚が住めなくなってしまうたのでした。

湖の水が蒸発してしまくと、それまでの湖の底が乾いて塩分が結晶になって残ります。

そして風が吹くと、この塩分をふくむ砂が巻き上げられて、アラル海のまわりにある町や村にも、また畑にも降りそそぎます。その砂の量は年間七五〇〇万トンというたいへんな量になっています。

塩分が畑に降り積もるため、農作物が育たず、広い範囲にわたって生態系がこわされてしまいました。川や湖の水が減ったので、井戸も枯れてしまいました。湖の水がおだやかにしてくれていた気候も、湖が小さくなって、すっかり変わってしまいました。

影響は作物や生態系だけではありませんでした。人間にもおよんでいます。アラル海のまわりでは鼻やのどの病気や、喉頭がんというがんが増えています。空気が汚れただけでなく飲む水も汚れてしまったために、いろいろな病気が多発することになってしまいました。

こうしてアラル海は二〇世紀最大の環境破壊といわれるようになってしまったのです。しかし、人類が地球の上にある、かぎられた水をこのように使いつくしてしまったり、汚してしまうことは、アラル海ほど大規模ではなくても、世界中で起きていることなのです。

（島村英紀『地球環境のしくみ』）

* 零下一〇度……マイナス一〇度。

* 肝心……最も重要なこと。

* カザフスタンとウズベキスタン……中央アジアの国々。

* ソ連……ソビエト連邦のこと。かつてロシアを中心に構成された国家。

* 喉頭……のどの一部。

問一 この文章を前半と後半に分けるとしたら、どこで区切るのが適切ですか。後半の初めの五字を本文中から抜き出さないさい。

問二 A・B・C・D にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。（ただし同じ記号を二度以上使わないこと。）

ア また イ しかし ウ なぜ エ じつは オ だから

問三 ①「地球環境問題」について、次の各問に答えなさい。

(1) 「地球環境問題」の例としてあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 海や川や飲み水が汚れて、人間の健康にも影響が出ている問題。

イ 水が足りなくなり、地球の気温が零下一〇度になる問題。

ウ 世界の人々が食べる食糧が足りなくなってしまう問題。

エ 台風や竜巻が増えるといった異常気象が起きやすい問題。

オ 灌漑農業ができなくなり、農作物の量が減ってしまう問題。

(2) 「地球環境問題」の解決のために、筆者は「どうしなければならぬ」と述べていますか。本文中から四十字で抜き出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

問四 ②『『いつも悪者』というわけではないのです。』とありますが、二酸化炭素のどのような役割からそう言えるのですか。二十五～三十五字で説明しなさい。

問五 ③「この農業のための水が、世界各地で、足りなくなっているのです。」とありますが、アラル海の水が減り続けた大きな原因は何ですか。本文中から八字で抜き出さないさい。

問六 ④「二〇世紀最大の環境破壊」とありますが、なぜアラル海はそうに言えるのですか。本文中の言葉を使って四十～五十五字で答えなさい。

問七 ⑤「かぎられた水」とありますが、なぜ地球上の水の量は限られているのですか。その理由となる部分を「」から。に続く形で本文中から三十九字で抜き出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

【三】

次の①～⑩の　　のカタカナは漢字に、漢字はひらがなになおしなさい。

- ① 専ら外国語で書かれた本を読む。
- ② なにげない一言が気に障る。
- ③ ネットに流れた情報が拡散する。
- ④ 政治家は弁舌に長けている。
- ⑤ 乱れた社会が悪の権化を生み出す。
- ⑥ あらかじめ商品をカクホしておく。
- ⑦ ヒンジャクな体をきたえあげる。
- ⑧ ラジオのエイセイ中継を聞く。
- ⑨ 東京の会社にツトめている。
- ⑩ 洗濯したセーターがチヂむ。

から。

在 学 校	立 区 市 町 国 私	受 験 番 号		氏 名	
-------------	----------------------------	------------------	--	------------	--